

# 視察報告書

2020年4月30日

府中市議会議長 様

会 派 名 市民クラブ

日 時	2019年10月2日（水曜日）
視 察 先	兵庫県加古川市
視察項目	病院統合と地方独立行政法人化のその後について
参 加 者	水田豊 土井基司 芝内則明
視察内容	<p>加古川中央病院は、府中市と同様、神鋼加古川病院という民間病院と加古川市民病院を2010（H22）年度に再編統合し、地方独立行政法人加古川市民病院機構が経営している。当初、二つの病院として経営していたが、現在は二つの病院を統合移転して加古川中央市民病院として600床の総合病院として地域の医療を支えている。</p> <p>地方独立行政法人加古川中央市民病院機構への質問事項</p> <ol style="list-style-type: none"><li>①加古川市民病院と神鋼加古川病院統合の理由、経過。</li><li>②加古川中央市民病院設立までの経緯と現在。</li><li>③医師の確保、招へいの現状。</li><li>④病院の財政状況、市から病院機構に対する繰入れの実態。</li><li>⑤地域医療構想と病院の位置づけ</li><li>⑥統合から新病院設立までの住民の理解、議会の対応</li></ol> <p>再編するにあたっての背景として、医師派遣をおこなう大学医局の考えがおおきな要因としてあった。当該地域の医療圏の中に病床200床以上の中核病院が6病院あり、そのうち5病院が神戸大学の医局からの医師派遣を受けていた。そして神戸大学からの医師派遣がこれまで通りいかななくなるとの考えから大学医局側から機能分担と統合再編の検討を要請されたこと。旧加古川市民病院がそのなかでも305床と最大であり、大学の教育施設としての大規模関連病院として存続する必要があったこと。旧神鋼加古川病院は、198床の循環器に強みのある急性期病院として存在していたが、強みを生かし規模を大きくしたいという考えと建物の老朽化で建て替えの必要性があったこと。こうしたことから大学と2病院の方向性が一致して経営統合へとすすんだ。</p> <p>現在は、消化器、心臓血管、周産母子、こども、がんという5大センターを中心として診療期の充実した病院として存続している。医師数は232名、看護師数727名、診療科目は当初の19から32に増えていて順調に経営している。</p>
所 感	<p>医師を派遣する神戸大学側の意向をもとに再編議論がはじまっているように、再編の際に医師確保をどうするのかしっかり議論している。</p> <p>府中市での再編統合は、医師確保のためといいながら、医師の安定的な確保について肝心の議論をしていない。現に府中市市民病院では外科医の常勤医師がいなくなっており、そのツケがいまに至っている。このまま抜本的な対策を講じなければさらなる縮小においこまれる。これからの府中市政にとって最大の課題の一つであり、市民的な議論が必要。そのためにも地方独立行政法人府中市病院機構には情報を開示し、市民に経営状況を説明する義務がある。</p>

# 視察報告書

2020年4月30日

府中市議会議長 様

会 派 名 市民クラブ

日 時	2019年10月3日（木曜日）
視 察 先	滋賀県東近江市 市立能登川病院
視察項目	自治体合併と病院再編について
参 加 者	水田豊 土井基司 芝内則明
視察内容	<p>合併して二つの公立病院、東近江市立能登川病院、蒲生医療センターを抱えた東近江市の病院再編について説明を受けた。</p> <p>質問事項は以下のとおり。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>①市立能登川病院、市立蒲生病院統合の理由、経過。</li><li>②能登川病院の指定管理の理由、現在の経営の実態。</li><li>③医師確保と市の経営支援の内容。</li><li>④両病院と国立滋賀病院との役割分担。</li><li>⑤住民運動の経過、現在の実態と市の関わり。</li></ol> <p>（市民が考える医療フォーラム、三方よし研究会など）</p> <p>医師の臨床研修制度の改革による医局人事の医師派遣の減少などで、地域の公立3病院の医師数が、2004年の163人から2010年には133名と30人も減少し、地域医療の崩壊の危機に陥った。そこで2010年1月に東近江医療圏地域医療再生計画を策定。国公立3病院の再編により東近江市内に中核になる病院を整備し、医療機能の集約化・重点化をはかり、安定的に医師を確保するために大学医学部と連携した医師確保システムを構築することにした。具体的には国立の滋賀病院220床を320床の東近江総合医療センターに、東近江市立の能登川病院、蒲生病院は各120床を60床に再編した。現在は、東近江市立能登川病院は、医療法人社団昂会が指定管理する病院となり、蒲生病院は19床の有床診療所として継続している。市立能登川病院は指定管理後、常勤医師数が6名から13名に増えており、それに伴い入院患者数35人が71人に倍増している。</p>
所 感	<p>再編の際に医師確保をどうするのかしっかり議論し、指定管理制度導入以後は、市立の2病院で診療科目を補う形で医師数は増加している。</p> <p>府中市での再編統合は、医師確保のためといいながら、医師の安定的な確保について肝心の論議をしていない。現に府中市民病院では外科医の常勤医師がいなくなっており、そのツケがいまに至っている。このまま抜本的な対策を講じなければさらなる縮小においこまれる。これからの府中市政にとって最大の課題の一つであり、市民的な議論が必要。そのためにも地方独立行政法人府中市病院機構には情報を開示し、市民に経営状況を説明する義務がある。</p>

# 視察報告書

2020年4月30日

府中市議会議長 様

会 派 名 市民クラブ

日 時	2019年10月4日（金曜日）
視 察 先	岐阜県羽島市 羽島市役所・積替施設
視察項目	一般ごみ等の処理に関わる積替施設について
参 加 者	水田豊 土井基司 芝内則明
視察内容	<p>府中市は、神石高原町、福山市とともに、ごみ固形燃料工場で燃やせるごみ等の処理を行っている。本山町のクリーンセンターで可燃ごみをRDF（ごみ固形燃料）に加工して、福山市箕沖町の福山リサイクル発電所に運んでいる。この事業は2024年3月で終了する予定となっており、代わりに、ゴミをそのまま燃やして発電する、大型の焼却施設を箕沖町につくる予定となっている。そこまでの運搬の効率化を考えると、ゴミ収集車から大きなコンテナなどに積み替える必要がある。そのため、積替施設の建設経費、運営状況などを調査した。</p> <p>羽島市の場合、年間可燃ごみを約1万5千トンとして、積替施設の建設費は、約4億円、維持管理費は年間5千万円、焼却処分費は年間約5億4千万円ということだった。</p> <p>説明後、積替施設を見学した。周囲への配慮から臭気対策も万全を期しており、施設の外では臭気を感じることはなかった。積替えのシステム自体は単純で、大型のダンプに積み替えて、重機で押さえて圧縮するものであった。</p>
所 感	<p>府中市の場合は、可燃ごみは約1万トン計算になる。単純に計算すると、3億円を切ることになるが。</p> <p>施設整備費の大半は施設周辺の臭気対策ではないかと感じた。羽島市の積替え方法だと、運搬途中の臭気や汚水漏れが心配。福山市の市街地を経由することを考えると、もっと費用がかさむ方法を取る必要があるようだ。</p>